

[成果情報名]2008年に長崎県で発生したセジロウンカ、トビイロウンカの薬剤感受性

[要約]2008年に長崎県で発生した稲ウンカ類の薬剤感受性は、セジロウンカがBPMCとフィプロニルに対して低く、中国福建省採集の本種と同様の傾向を示す。また、トビイロウンカは2007年と同様にイミダクロプリドとBPMCに対して低く、両ウンカ種間で薬剤感受性に違いがある。

[キーワード]2008年、稲、トビイロウンカ、セジロウンカ、薬剤感受性

[担当]農林技術開発センター・環境研究部門・病害虫研究室

[連絡先](代表)0957-26-3330

[区分]農産（生産環境）

[分類]指導

[背景・ねらい]

近年、本県において海外飛来性害虫である稲ウンカ類の薬剤感受性の低下が問題となっている。また、ウンカ類の飛来源である北ベトナムや中国南部では、薬剤多用による感受性低下が起きてことが明らかになっている。本県では、最近2007年発生したトビイロウンカの感受性について明らかにしている（小嶺，2007）が、セジロウンカについては明らかでない。そこで、2008年に発生したウンカ類の薬剤感受性の違いを明らかにして、防除対策に資する。

[成果の内容・特徴]

1. 2008年に本県で発生したセジロウンカは、イミダクロプリド（アドマイヤー剤）、エトフェンプロックス（トレボン剤）、チアメトキサム（アクタラ剤）の3剤に対して薬剤感受性が高いが、BPMC（バッサ剤）、フィプロニル（プリンス剤）に対しては低い（図1）。また、本県への主要な飛来源の一つと考えられる中国福建省採集のセジロウンカの薬剤感受性は、本県での採集個体群とほぼ同様の傾向を示す（図1）。
2. トビイロウンカの薬剤感受性は、2007年と同様にエトフェンプロックス（トレボン剤）、フィプロニル（プリンス剤）、チアメトキサム（アクタラ剤）の3剤に対して高いが、イミダクロプリド（アドマイヤー剤）、BPMC（バッサ剤）が低く（図2）、フィプロニルとイミダクロプリドに対して、セジロウンカと相互に異なる。

[成果の活用面・留意点]

1. 検定は微量局所施用法による。なお、LD50値は、供試ウンカ数の50%が死亡する薬量（ウンカの体重1g当たり）である。
2. 2008年の供試虫は、長崎市採集の個体群であるが、本情報は概ね県下全域に適用できる。
3. 感受性低下の薬剤を使用すると、粉剤では効果が低いおそれがある。また箱処理剤では残効が短くなることが考えられるため、追加防除が必要である。
4. 今後も薬剤感受性のモニタリングを継続して実施していく必要がある。
5. 両ウンカ種は、薬剤感受性がやや異なる（図1、図2）ため、防除薬剤の選定において注意が必要である。

[具体的データ]

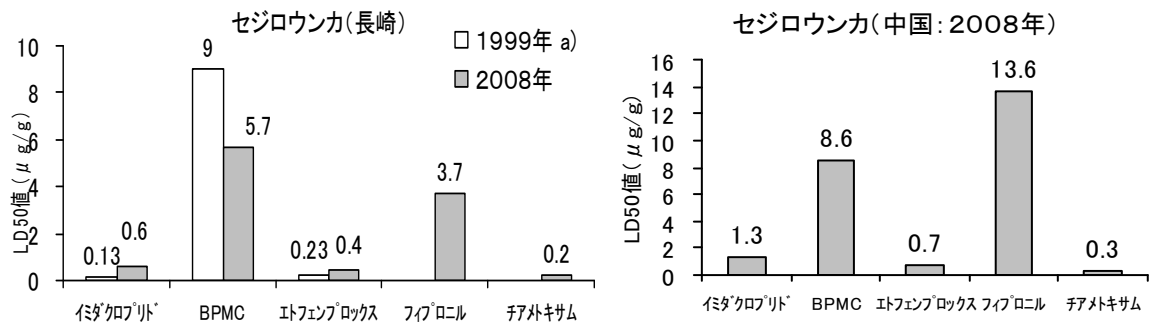


図1 セジロウンカの薬剤感受性(LD50値: 50%致死量: $\mu\text{g/g}$)

a) Nagata et al. におけるLD50値

注) 1999年のフィプロニル、チアトキサムは未調査

供試虫: 長崎個体群(左図)は2008年8月に長崎市で採集した累代4世代目、中国個体群(右図)は2008年9月に福建省で採集した累代4世代目の羽化後5日以内の長翅雌成虫

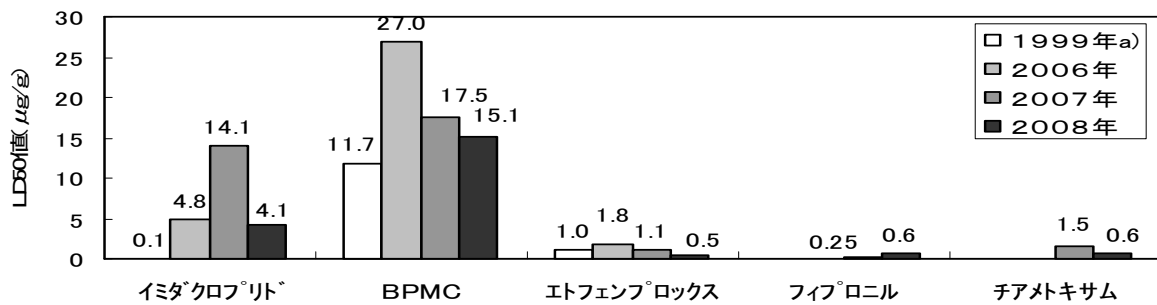


図2 トビロウンカの薬剤感受性(LD50値: 50%致死量: $\mu\text{g/g}$)

a) Nagata et al. におけるLD50値

注) 1999年および2006年のフィプロニル、チアトキサムは未調査

2006~2008年の供試虫: 長崎市で採集した累代2~3世代目の羽化後5日以内の長翅雌成虫

[その他]

課題名: 農林業生産現場への緊急技術支援プロジェクト研究

予算区分: 県単

研究期間: 2002年度~

研究担当者: 福吉賢三、小嶺正敬 (現 五島普及センター)